

第3章

第4期基本計画における 文化振興施策について

- 1 第4期計画のステージの構成
- 2 4つのステージと実現に向けた施策

1

第4期計画の ステージ構成

前章でまとめた見直しの視点を踏まえ適切な取組を実施していくために、p.35において第2次まちづくり戦略ビジョンの分析結果から導いた「文化芸術の価値を高める手法」なども踏まえ、第3期計画で設定した4つのステージと施策の再構築を行い、今後5年間で必要となる取組を実施していきます。

これまでの「ステージ4 視点の検討」については、ステージ全体を支えるものとして、ステージではなく、第4章でまとめることとするとともに、新しいステージ4には、本計画でより重視すべきと考える、異分野連携等の新たなチャレンジの推進やそれを実現するためのアーティスト支援を実施する「ステージ4 文化芸術の領域拡大」を創設します。また、文化芸術の持続的な発展、創造を進めるためには、アーティストへの支援だけでなく、アーティストを支える環境整備も重要であることから、「ステージ2 未来への布石、育成、支援」において、アーティストを支える環境整備を目指す「文化芸術を支える土壌づくり」を位置付けます。

こうした取組を進めることで、豊かな人間性の涵養や創造性の育成といった文化芸術の本質的価値の向上はもとより、文化芸術を幅広い分野に活用することで、都市の魅力向上を図ります。

【4つのステージと施策の再構築】



2

4つのステージと 実現に向けた施策

ステージ 1 機会の充実

文化芸術は、その場に参加する機会を通じて多様な価値観を尊重する姿勢を育て、他者との相互理解が進むという社会的包摂機能を有しており、今後も、あらゆる人々が容易に文化芸術に触れられる環境を充実させることで、多様な価値観が尊重され、創造的活動へとつながります（ステージ1に位置付けられる具体的な取組はp.74参照）。

施策1 多様な文化芸術に親しむ機会の提供

音楽、美術、演劇、メディアアートなどの文化芸術イベントを効果的に開催するとともに、まちのいたるところで、年齢、障がいの有無、言語の違い、経済的な状況に関わらず、あらゆる人が文化芸術に容易に触れることができる場や参加する機会をつくり、多様な価値観を尊重し、他者との相互理解が進む包摂的環境を推進する取組を進め、まちのにぎわいを創出していきます。

また、企業への働きかけを行うとともに、民間の主体的な取組とも連携を図りながら、札幌の文化芸術活動に刺激を与え、多くの市民に親しまれる取組を進めます。

重点取組事項

誰でも芸術に親しめる環境の整備

障がいのある方が、多様な文化芸術活動に参加できる環境づくりを進めます。

<主な取組>

- 文化芸術施設のバリアフリー化の推進
- 障がいのある方等に向けた音楽ワークショップやコンサート等のイベント
- さっぽろアートステージでのボードレスアート作品展
- その他様々な文化芸術イベントに誰もが参加できる更なる取組の検討

施策 2 文化芸術のための施設の活用等

文化芸術施設は、市民に感動と希望をもたらし、創造性を育み心豊かな生活を実現するための場であるとともに、社会参加の機会を開き、地域コミュニティの創造や再生、地域発展などといったまちづくりの重要な営みを支える場でもあるという点を念頭に置いて、施設を維持・運営していきます。

また、文化芸術は、家庭、学校、地域社会など様々な場所で教育や学習活動の一環として展開されていることから、文化芸術施設を市民の創造性喚起や学習の場として活用していきます。

重点取組事項

今後の大規模多目的ホールの在り方検討

多様な文化芸術施設のなかでも、文化活動の重要な場であり、整備や維持に多くの費用がかかる大規模多目的ホールを将来にわたり維持していくことは、とりわけ重要です。

こうした観点から、本施策における重点取組事項として、大規模多目的ホールが3館（札幌文化芸術劇場hitaru、札幌教育文化会館、札幌市民ホール¹⁹）存在する「3館体制」維持の必要性について、令和元年度（2019年度）に行ったホール需給調査²⁰の成果及びその後のコロナ禍によるホール需要変動を確認し、検討を行います。

¹⁹ 仮に3館について、安定的なホール供給のため大規模修繕又は建替えを実施する場合、計画立案から竣工までは長い期間を必要とすることから、早期の事業着手が求められますが、そのためには、前提として本件ホールの在り方検討が必要となります。

²⁰ 将来にわたる大規模多目的ホールの需要及び適正な供給量を検証し、令和22年（2040年）頃までは調査時と同程度の需要が維持されることが予測されました。但し、コロナ禍後の鑑賞形態の変化の有無を含めて再度需要予測を行う必要があります。

コラム Column : 「社会的包摂」と「アール・ブリュット」

近年、文化芸術に期待される社会的な役割の1つとして、「社会的包摂」という言葉がよく用いられます。この言葉は、社会的弱者も含めたあらゆる人々が孤立し排除されないよう、社会の一員として受け入れ、互いに支え合おうという考え方を表しています。

一方、同じく近年わが国で用いられる言葉として、「アール・ブリュット」(art brut) というものがあります。この言葉は特に障がい者芸術を指して用いられる場合が多いですが、本来は「生の芸術」を意味するフランス語であり、障がいのある方に限らず、既成の美術教育訓練を受けていない人々の独学によるありのままの芸術を指すものです。

この言葉を提唱したフランスの画家ジャン・デュビュッフェは、精神病患者などの作品を収集しそれらをアール・ブリュットと呼びましたが、これは従来「精神病患者の芸術」として扱われていた作品に対する認識を塗り替え、既存の芸術に劣らない価値を持ったものとして扱うことを意図したのだと考えられます。

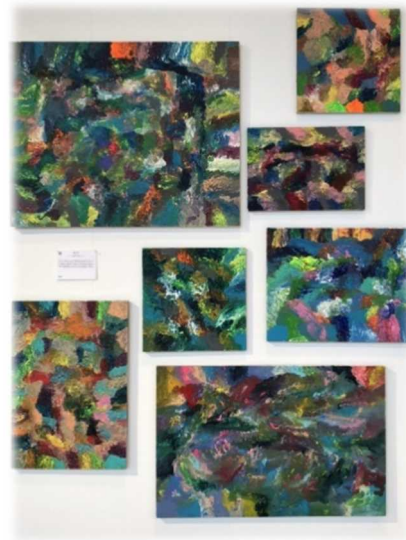
つまりアール・ブリュットという言葉は、芸術の価値を障がいの有無などといった個人の属性で決めようとする価値観を否定し、芸術をありのままに価値あるものとして受け入れようとする概念であると言えます。

アール・ブリュットをこうした意味で捉えると、個人の属性によって人が排除されることのない社会を目指す社会的包摂という考え方と、非常に親和的な言葉であることが理解できます。

“障がいがあるから”支えるのではなく、“誰もが”変わらず文化芸術に触れ、取り組み、社会に参画できるような施策を進めていくことが、本当の意味でのアール・ブリュットを通じて社会的包摂を実現することであると考えられます。

コラム
Column : 「社会的包摂」と「アール・ブリュット」

サッポロアートステージ ART STREET 「ボーダレス作品展」の様子



文化芸術の継承、持続的な発展、創造を進めるためには、未来を担う子どもたちの文化芸術に触れる機会の充実や、文化芸術を支える仕組み、人材の育成を含めた環境整備は欠かせないものであることから、継続的な取組を進めていきます（ステージ2に位置付けられる具体的な取組はp.76参照）。

施策1 子どもたちの文化芸術を体験する機会の充実

文化芸術を継承し、発展させていくため、特に感受性豊かな子どもの頃から、文化芸術に親しみ、体験するなどし、その楽しさや大切さを実感する様々な機会に触れることを通じて、芸術的感性や豊かな心、文化的な伝統を尊重する心を育てていく必要があります。

今後も、学校や民間の文化芸術団体の活動とも連携しながら、子どもたちが継続的にこのような体験をできる機会を設け、札幌の文化芸術の未来を担う人材の育成を図っていきます。

重点取組事項

学校と連携した

子どもたちへの文化芸術に触れる機会の提供

家庭環境に左右されることなく、子どもたちに文化芸術に触れる機会を提供するために、引き続き学校と積極的に連携した取組を推進していきます。

施策2 文化芸術を支える土壌づくり

文化芸術の持続的な発展には、創造する側、鑑賞する側、場の提供者、支援者など様々な関係者の間に入り、事業全体の仕組みを調整し、創り上げていくアートマネジメントを行う人材をはじめ、様々な専門家やボランティアなどの方たちが文化芸術を支える環境が重要です。こうした様々な方の活動の場やつながりの場の創出や、全国的に設置が進むアーツカウンシルの検討など、文化芸術を支える環境整備を継続して行います。

また、持続可能かつ充実した文化芸術の振興に向けて、民間事業者との連携を進めるとともに、文化芸術振興に向けた遺贈を含めた寄付についても積極的に広報を行うとともに、基金を活用した取組も進めます。

重点取組事項

札幌に適したアーツカウンシル機能の検討

本市の実情をよりの確に反映した文化芸術施策の実現を目指し、全国で設置が進むアーツカウンシル²¹の調査・研究を行い、本市での必要性及び仕組みについて検討します。

²¹ 行政とは独立した立場で文化芸術施策の推進を担う組織。詳細は、p.59 コラム『アーツカウンシル』とは？』参照

コラム Column : 「アーツカウンシル」とは？

「アーツカウンシル」とは、イギリスの「アーツカウンシル・イングランド」(Arts Council England) に端を発し、行政とは独立した立場で文化芸術施策の推進を担う組織のことを指します。その定義は必ずしも一定ではありませんが、文化芸術が政治的影響から離れて自由であるべきであるという考えに基づき、**行政から一定の距離を置いて独立した立場を保つことや、専門的な人材を登用することにより専門性に基づいた文化芸術活動への支援・調査研究などを行うことが**、概ね共通した特徴です。わが国では、文化芸術の保存、振興、普及や全国の文化芸術活動に対する援助を行う独立行政法人日本芸術文化振興会が、「日本版アーツカウンシル」として位置付けられています。

一方、近年では国内各地で、地域の実情をよりの確に反映した文化芸術施策を実施するため、各地の課題に即した機能を有する「地域アーツカウンシル」の設立が相次いでいます。地域アーツカウンシルの特徴として、行政からの独立性よりも、地域ごとに異なる課題感や目的に根差した専門性を重視する傾向が見受けられます。これは、各地の地域課題が多様化・複雑化する中で文化芸術に求められる役割も同様に変化し、政策的判断を行う行政とは別に、より専門的な見地から、各地の実情に合わせた文化芸術活動の支援や調査研究等を行う組織が求められているのだと考えられます。

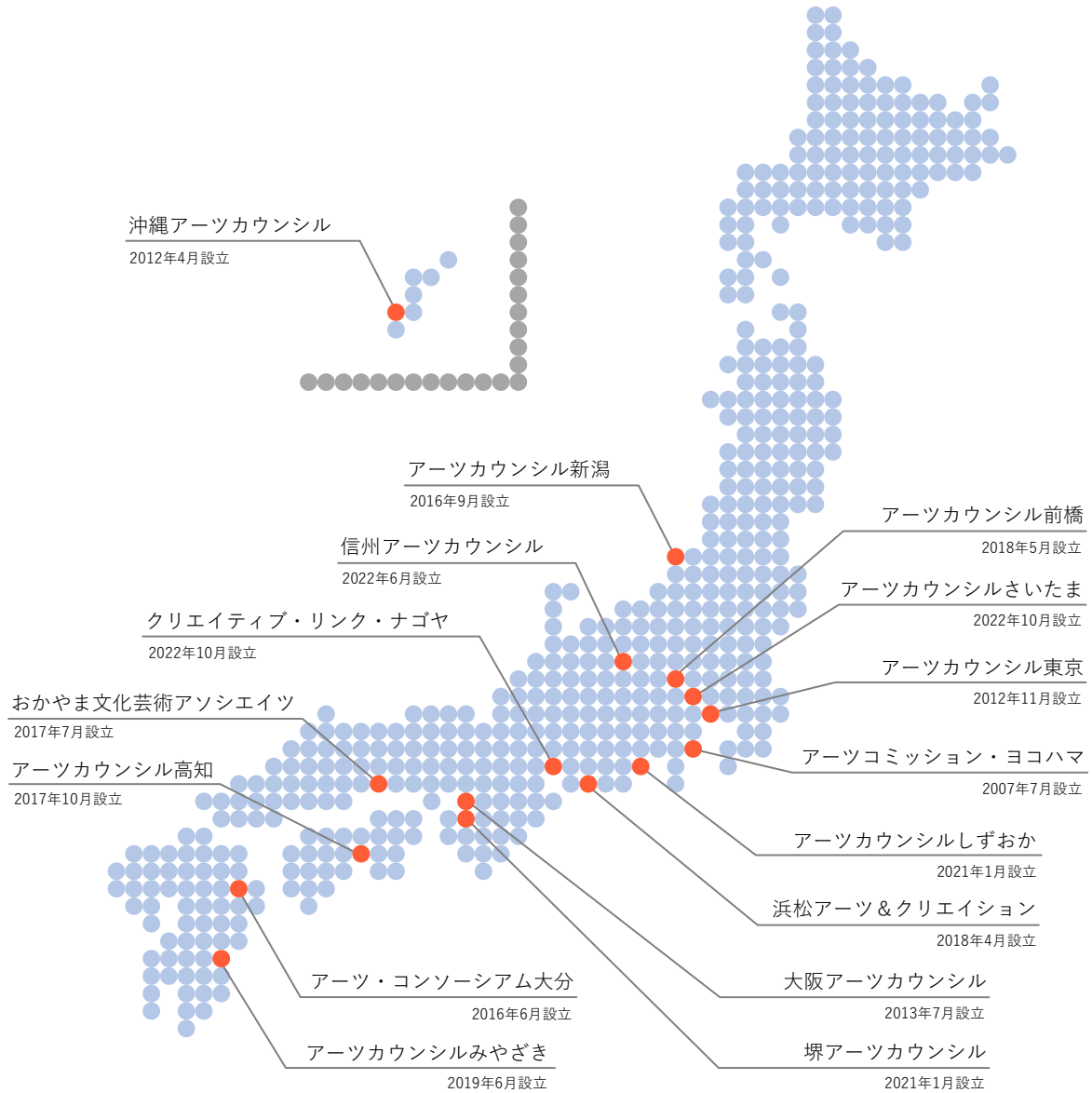
地域アーツカウンシルに関する議論において最も大切なのは、単に専門的な組織を作ることではなく、その地域に最も適した文化芸術支援の仕組みや体制を組み立てていくことです。

札幌市では、これまで行われてきた文化芸術支援の取組や前述の札幌市文化芸術創造活動支援事業、そして全国的な地域アーツカウンシルの広がりなどを踏まえながら、本計画の期間を通じて札幌のまちにとって最適な文化芸術支援の仕組み・体制を、より俯瞰的な視点から設計していきます。

コラム Column : 「アーツカウンシル」とは？

22

全国の主な地域アーツカウンシル設置事例



²² 「アーツカウンシル・ネットワーク」 (<https://artscouncil-niigata.jp/artscouncil-network/>) 加盟団体のうち、明確にアーツカウンシルを標榜しているものを列挙。

文化芸術や文化財が持つ創造性や価値を適切に保存継承しながら効果的に活用し、まちの活性化や地域コミュニティの形成、札幌のブランド発信につなげるなどの取組を進めます（ステージ3に位置付けられる具体的な取組はp.79参照）。

施策1 文化遺産・自然遺産の保存と活用

市民が札幌の貴重な文化遺産や自然遺産の価値を十分に認識し、これを大切に保存、継承、発展させることが重要です。

また、未指定も含めた文化財や伝統的な文化等の多様な魅力を、観光を含めまちづくりに積極的に活用し、地域の活性化やコミュニティとのきずなを深める環境を整備していくことで、次の世代への橋渡しを行っていきます。

重点取組事項

（仮称）札幌自然史博物館の整備に向けた検討

札幌市博物館活動センター²³で行う整備に向けた各種研究調査や、自然と人間の関わり合いが生んだ札幌の魅力を実感してもらえる取組を行い、ふるさとへの愛着と誇りを育み、札幌が積み重ねてきた文化と魅力を国内外に発信する「（仮称）札幌自然史博物館」の整備に向けた検討を進めます。

²³（仮称）札幌自然史博物館の整備に向け、様々な人や機関との連携・交流を図りながら、市民参加・ソフト重視の博物館づくりを進める活動を行っており、札幌の独自性を自然史の観点から明らかにするために、博物館活動の基盤である「調査・研究」「資料の収集・保存」、それらを活用した「普及・交流事業」を実施しています。

施策2 札幌の文化芸術を通じた国内外への魅力発信

国内外の創造都市との交流や、雪まつりといった観光イベントと連動した取組を行うことを通じて、国内外の観光客が文化芸術に触れる機会を増やすなど、札幌の国際都市としての魅力を一層高めていきます。

また、SDGs未来都市である札幌市が進める都市全体のサステナビリティの向上を図るため、札幌国際芸術祭やPMF、サッポロ・シティ・ジャズなどの文化芸術事業においても、環境配慮に取り組み、都市のブランド力強化につなげていきます。

重点取組事項

文化芸術イベントと その他のイベント等との効果的な連携の検討

札幌の文化芸術の魅力発信を目的に札幌の強みである観光などとのより効果的な連携について検討を進めます。

コラム Column : 札幌市文化財保存活用地域計画

<背景と目的>

平成30年度（2018年度）の文化財保護法改正により、市町村が策定する文化財の保存と活用に関する総合的な計画を、同法に基づき文化庁長官が認定する制度が創設されました。

これを受け札幌市では、文化財や歴史文化の価値と魅力を多くの市民が共有し、大切に使いながら将来に継承していくことで、市民にも来訪者にも魅力あるまちづくりを進めるための基本的な方針を示すため、令和2年2月に「札幌市文化財保存活用地域計画（計画期間：令和2年度（2020年度）～令和6年度（2024年度）」を策定しました。

<文化財の保存・活用方針>

● 目指す姿

文化財の価値を多くの市民が共有し、大切に次の世代へ引継いでいく、
歴史文化の魅力あふれる都市

● 目指す姿の実現に向けた5つのアクション



<推進体制と取組事例>

札幌市等が実施する取組に加え、この計画を着実に進めるため、札幌市や経済団体、観光団体とで構成する「札幌市歴史文化のまちづくり推進協議会」を設置し、市民ワークショップによる文化財の掘り起こしや歴史文化を体験するシンポジウムのほか、関連文化財群とストーリーを設定し、魅力を発信することで新たな観光拠点の創出につなげる取組を行っています。

<今後に向けて>

目指す姿の実現に向けて、法令による指定等に関わらず、地域の歴史の中で大切に受け継がれてきた文化財を次の世代に引き継いでいけるような様々な取組を実施していきます。

コラム Column : サッポロカイギュウと小金湯産クジラ化石

— 博物館が生むつながり —

平成 14 年（2002 年）、小金湯温泉に近い豊平川の河畔から大型哺乳類の化石が見つかりました。博物館活動センターでは平成 15 年（2003 年）からこの化石の発掘及び調査を実施し、その結果、化石はカイギュウの一種であることが判明し、「サッポロカイギュウ」と呼ばれることとなります。

ジュゴンやマナティのようなカイギュウの仲間は、現在では暖かい海にしか生息していません。しかし、サッポロカイギュウは寒い海で暮らすために体を大型化させた最初のカイギュウだったのです。サッポロカイギュウは約 820 万年前、札幌が寒冷な海だったことを私たちに教えてくれました。



サッポロカイギュウ復元骨格標本
(AOAO SAPPORO での展示)

平成 20 年（2008 年）にはサッポロカイギュウ発見場所の付近から、クジラの化石が発見されました。発見者は、博物館活動センターがカイギュウの研究を行っていたことを知っていたため、急いでセンターに連絡したということでした。発掘調査の結果、全身の 7 割が発見されたこの小金湯産クジラ化石は、現在も博物館活動センターで研究が続けられています。クジラ化石は保存状態も良好で産出した数も多く、クジラの進化を解明する手掛かりを与えてくれる貴重な発見と言えます。博物館活動センターが行ってきたサッポロカイギュウの研究は、小金湯産クジラ化石の発見と研究につながりました。市民と博物館がつながることで、札幌の自然史に新しい光を当てることができたのです。



小金湯産クジラ化石復元骨格標本
(地下歩行空間での展示)

博物館は、単に「モノを並べている場所」ではありません。モノに資料としての命を吹き込み、それを適切に保存して未来に伝える場所です。モノが語る物語を展示や教育普及活動を通して市民に還元していく場所です。モノから創発された好奇心や発見を、さらにいろいろな分野につなげる場所です。

博物館活動を通じて得られた成果を市民や観光客に広く還元し、広く札幌のまちづくりにも貢献できる施設になるよう、札幌市は（仮称）札幌自然史博物館の整備に関する検討を進めていきます。

ステージ 4

文化芸術の領域の拡大

文化芸術が持つ創造性を点から面へと広げていくため、様々な分野との連携を進め、更なるまちの活性化や効果的な投資やイノベーションにつなげ、文化芸術が有する社会的・経済的価値の発揮を目指します。

また、創造都市・札幌の名に相応しく、文化芸術の多様な可能性を高め、アーティストの創造性が生み出す価値を地域社会に還元するため、アーティスト支援をより充実させます（ステージ4に位置付けられる具体的な取組はp.80参照）。

施策1

文化芸術の創造性を生かした他分野連携や 新たなコンテンツ等の活用

文化芸術が持つ創造性を点から面へと広げていくため、教育、まちづくり、福祉、経済など様々な分野との連携や、最新の科学技術、新たなコンテンツの活用により、まちの活性化や既存の観光資源の魅力向上に向けた取組を推進します。特に文化芸術を活用した集客交流の拡大など産業活性化に向けた取組に関しては、人口減少による大きな転換期を迎える本市のまちづくりにおいても、非常に重要な取組となります。

なお、取組に当たっては、企業、ボランティア、NPOなどの様々な主体や、北海道内の他市町村などの幅広い地域などと連携をしながら、進めていきます。

重点取組事項

創造性あふれる多様多彩な文化芸術の展開

マンガ等のポップカルチャーの活用や異ジャンル融合、異分野連携、実験的試みなどを通じて、文化芸術の新たな可能性を探求します。

札幌国際芸術祭（SIAF）の実施

札幌国際芸術祭は、本祭開催年のみならず準備期間においても企業等、経済との関わりを通じた、新たな創造性を醸成する取組を推進していきます。

施策2 アーティスト支援の充実

文化芸術活動をさらに充実・発展させたいという意志を持っている地元の個人・団体に対して、発表の場やプロモーションの機会を提供するなど、アーティスト等がステップアップするための支援や新たなチャレンジを後押しする取組を行います。また世界中のアーティストから刺激を受け、札幌のアートがレベルアップできる環境を目指します。

重点取組事項

アーティストの新たなチャレンジを後押しする支援の検討

令和4年度（2022年度）に実施した中間支援組織を通じたアーティスト支援を踏まえ、令和6年度（2024年度）はアーティストのステップアップ支援や文化芸術活動を通じた地域活性化を目的とする実証実験を行います。この実証実験を踏まえ、新たなチャレンジを後押しするアーティスト支援の在り方について検討します。

コラム Column : 札幌国際芸術祭

● 札幌国際芸術祭とは

札幌国際芸術祭（Sapporo International Art Festival 略称：SIAF）は、3年に一度、札幌で世界の最新アート作品に出合える特別なアートイベントです。

会期中は、札幌市内のさまざまな場所で展覧会やパフォーマンスなど多彩なプログラムが展開されます。また、会期以外にも継続的に、札幌の特色を生かしたメディアアートプログラムや、市内イベントと連携したプログラムを行っています。



中谷美二子 <FOGSCAPE #47412>
Photo : Keizo Kioku

過去の札幌国際芸術祭

	SIAF2014	SIAF2017
テーマ	都市と自然	芸術祭ってなんだ？
会期	7月19日～9月28日（72日間）	8月6日～10月1日（57日間）
会場数	18会場	44会場
参加アーティスト数/作品数	64組/214作品	151組/697作品
来場者数	478,252人	381,697人

● 札幌国際芸術祭における異分野連携の取組

札幌国際芸術祭では、文化芸術が持つ創造性のもと、本祭会期内外を通じて異分野連携の取組を推進していきます。アートを鑑賞する場としてだけでなく、市民が主体的に参加・体験できる取組や、社会課題解決を目指す企業等との協働を通じて、文化芸術の本質的価値にとどまらず、社会的・経済的価値を創出していきます。



SIAF2024 における取組の例

- (1) 企業との連携による新たな価値創出
 - 最先端技術を活用したメディアアート作品の展示
 - 未来をテーマに鑑賞者がコンテンツを作成できる体験型作品の展示
 - チケットシステムのDX
- (2) 教育分野と連携したワークショップ
 - 小中学校へへの出前授業形式によるプログラミングを活用した作品制作

コ ラ ム
Column : 札幌にふさわしいアーティスト支援の検討

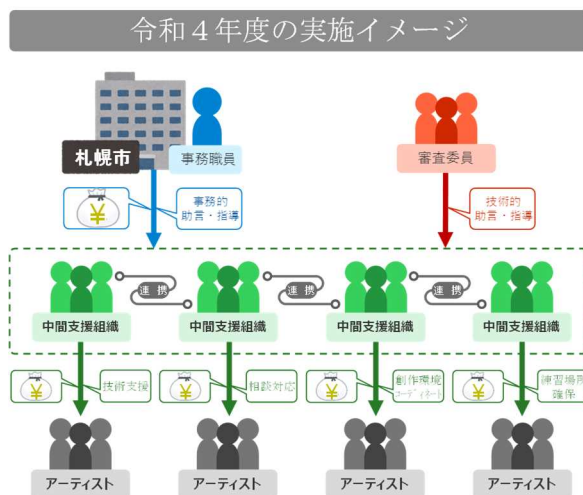
● 「札幌市文化芸術創造活動支援事業」の実施

これまでも札幌市では様々な文化事業を行ってきましたが、多くは文化芸術を支える施設等の整備や、将来の担い手の創出を目的とした鑑賞・体験機会の提供が中心でした。

しかし、札幌の文化芸術活動をより活発にし、生み出される創作物、さらにはその創造的な発想や新しい価値を地域にもたらすためには、市内の**アーティスト等のニーズに即した多様な支援**を行い**新たなチャレンジや社会的な広がり**を下支えする必要があります。

こうした課題感に基づき、令和4年度（2022年度）にアーティスト等を支援する新しい方策として試験的に行われたのが「**札幌市文化芸術創造活動支援事業**」です。

本事業では、行政がアーティスト等に直接行う従来の支援とは異なり、アーティスト等の実情を深く理解している民間事業者から支援内容の提案を受け、特に優れたものに補助金を交付しました。令和4年度（2022年度）は計43件の提案のうち4者を「中間支援組織等」として採択し、多様なアーティスト支援を実施しました。



● これからの新しい支援の在り方

試行実施の結果、運営の体制や手法に課題はありますが、アーティストへのよりきめ細かい支援を行うという点では一定の効果を持った支援の仕組みであることが明らかになりました。

こうした支援を持続的なものとし、地域全体で文化芸術を支える環境を整えるためには、アーティスト等が**新しい取組や領域へチャレンジ**することを促し、それによって生み出される**新たな価値が地域社会に還元される仕組み**を作らなければなりません。

また、こうした仕組みの中から文化芸術の取組における企画やマネジメントを担う人材が生まれてくるよう、**人材育成**の観点も併せ持つ必要があります。

札幌市ではこうした観点から、「札幌市文化芸術創造活動支援事業」のさらなる改善と検証を進めていきます。

